

柳田雑記（5）

石垣綾子は「石垣綾子日記」に書いている。



日本の無条件降伏。8月15日は、真夏だというのに、ニューヨークは肌寒い曇り日だった。

私達は、どんなにこの日を待ち焦がれたことだろう。悪夢の日々はおわったのだ。敵国人として、アメリカに暮らす私達が、懐かしい祖国の傷つけられて姿を遠くから見ていることが、どんなにつらかったか。

ついにその時が来たのだ。私は両手を高くかざして、ありったけの声で叫びたかった。家の中などに、じっとしてはいられない。私は栄太郎を促して、街へとびだした。私たちは帰って行こう、廃虚の中から生まれ変わる日本へ、再建の苦しみと喜びを、ともに分かち合える祖国の人々の中へ、抑圧されてきた人たちが穴倉から這い出て、新しい世界を創造していくその日本へ、遠い別世界だった日本がが、なんと身近に微笑みかけてきたことだろう。

私たちはこれからの日本をかたりあった。「でもね」と、私は小さな声で、栄太郎に言った。「天皇はいったいどんな気持ちで敗戦を迎えたのでしょうかね。人間の心を持っているのなら、責任を負うて、生きるに耐えられず、といった心境になるのが当然だとおもうわ。」

これが私の素朴な正直な疑問だった。

「天皇制維持」は、日本の支配層側の全面降伏の第一条件であった。支配階級は「国体にしがみついていたとしても、死滅の底に追い込まれた国民-は、怒りの行動

に立ち上がることはないのだろうか。

ムツソリーニは、変装して逃げる途中で逮捕され、愛人クララ・ベタッチとともに、イタリア・パルチザンに射殺された。かつてはイタリアのアイドルであったムツソリーニを、イタリア国民は不当な戦争の苦しみを体験して、その戦争責任を追及し、彼等自身の手で裁いたのではないか。

ヒトラーは降伏直前、民衆の憤激に追い詰められ、ベルリンの地下壕で愛人のエヴァ・ブラウンと共に自らの命を絶った。

だがおなじ敗戦国でありながら、日本の国民の反応は平穏で、支配層に寛大、天皇の責任追及の声はなにひとつ聞こえてこなかった。

戦後だいぶたってから、米 국무省が極密外交文書を公表したが、それによれば、マッカーサーは天皇の裁判に反対し、アイゼンハウアーにあてた手紙で次のように書いているという。

- 一、私は、天皇が第 2 次大戦中及びその開戦に導いた政治的諸決定に、直接責任をもっているとは思はない。天皇を裁判にかければ、数世紀に及ぶ報復を受けることになるだろう。何年かに渡って日本に、最低百万人の軍隊を駐留させることになるだろう。
- 一、天皇を戦争犯罪人として起訴することは、日本国民にきわめて大きな動揺を与えることは疑いなく、その反動はいかに過小評価しても、しすぎることはない。天皇は、日本国民全体を結び付けている象徴であり、天皇を破滅させれば、国民はバラバラになってしまうだろう。
- 一、すでに冷戦への第一歩をふみだしていたアメリカの対日政策上からも、天皇制存続は必須のことだったのだろうが、天皇の名によって 3 百万人を超える同胞の命を奪われていた日本国民の中からは責任追及の声が上がらず、天皇の「人間宣言」の欺瞞に、容易に屈服したことは、日本の将来に決定的な禍根となったと、私は考えている。

その責任をいまも忘れることなく追及しているのは、日本の行為によって千五百万人に上の犠牲者をだしたアジアの人々である。

その天皇は、アメリカでは記者団から戦争責任にかんして質問され、そのような文学方面の綾については……と、答弁をかわしたことを私はわすれない。あの戦争の責任は、単なる、「文学方面の、言葉の綾」にすぎなかったのだろうか。

戦後 50 年ちかく、たった今も、天皇の「責任」を追及し得なかった「責任」を、日本の国民は世界からも歴史からも問われている、とはいえないだろうか。

私は石垣綾子に全く賛成である。

もう少し具体てきにいえば 1944 年暮れに近衛人麻呂が天皇に会見して、この戦争はもうだめだから、降伏するようにすすめた。しかし天皇はもう一撃加えてその上で降

伏しようとな衛の進言を退けた。そして降伏までの8か月のあいだに2つの原爆をふくむ莫大な犠牲が発生した。昭和天皇の責任は重い。

2017.2.22 柳田 健。